

平成 30 年 10 月 24 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880124

氏名 原田佳緑、

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先 : 都市名 パリ (国名 フランス)

2. 研究課題名 (和文) : 19世紀後半パリの区庁舎装飾画における「人生の諸段階」主題 : 共和主義と象徴主義

3. 派遣期間 : 平成 30 年 4 月 2 日 ~ 平成 30 年 10 月 1 日 (183 日間)

4. 受入機関名・部局名 : パリ第 1 大学 文化社会美術史学専攻 (EA4100 HiCSA)

5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先での研究内容

今回の研究滞在中には、パリの区庁舎の装飾画にみられる「人生の諸段階」の絵画主題について、19世紀後半の各時期と対応する四つの視点を設定し、研究を行った。この研究対象に着目することによって、西洋美術に古くからある人生の諸段階の主題が、19世紀末西歐美術を対象とした従来の研究では、象徴主義の観点から取り上げられてきたのに対して、同時期のフランスの公共装飾画では、戸籍を司る区庁舎の役目をはじめ、第三共和制の政治や社会の動向と密接に結びついていた側面を明らかにすることを目的としている。派遣先では、これらの装飾画が、第三共和制下の社会において、どのように受け取られ、どのような役割を果たしていたか、という受容の側面を考察するために、一次資料の調査収集を行った。具体的には、作品の注文や審査の過程を示す、行政文書や書簡、新聞・雑誌の批評記事、また、装飾画と関連する図像を含む、ポスターや挿絵を調査した。

研究状況

派遣期間中には、上記の一次資料調査と平行して、対象作品群にみられる主題表現の類型化を行い、人生の諸段階の主題を構成する、典型的な図像について、それぞれ社会的な文脈の考察を進めた。個々の作例にまたがる、全体の動向の考察としては、当初婚礼の間に要求された市民婚の主題から人生の諸段階の主題が派生し、区庁舎の他の空間に広がった人生の諸段階の主題は、共和主義の原則や市民の美德というテーマを内部に取り込んでゆき、家族、労働、教育を表すイメージで構成されることによって、第三共和制の国家形成と国民統合の機能を果たしたことを明らかにした。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果発表の見通し

派遣期間に得られた研究成果は、まず一篇の論文執筆を進め、その内容について 2019 年 5 月にパリで開催される国際シンポジウムでの口頭発表を申込み、査読を通過した。発表後には学術誌への投稿を予定している。これと並行して、学会発表と学会誌への投稿を目標とする二篇目の論文執筆を進めた。今回の派遣で得ることのできた知見とデータはすべて、最終的に 2021 年～2022 年の提出を目指している博士論文の一部となる。

今後の研究計画の方向性

今後の研究では、今回の研究成果を発展させて、人生の諸段階の主題を構成する各イメージと、社会的なイデオロギーとの関係について考察を深めることで、この絵画主題が有した社会的、政治的な側面を明らかにしてゆく。また、研究対象を広げ、20 世紀の第一次大戦前までの状況およびフランスの地方都市の主要作例を考慮に入れる。それにより、これまで第三共和制の公共装飾画の分野において、断片的に語られてきた人生の諸段階の主題について、社会背景と近代絵画の動向に照らした、より明確な位置づけを与えることを目指してゆく。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

受入教授からの支援

派遣期間には、受入教授の講義に出席したほかに、面談と電子メールを介した指導を受けた。それにより、まず今回の研究滞在の早い段階で、外国語で学術論文を執筆することの難しさと意義を認識できた。このことは、使用言語に依らず、学術論文作成に必要な議論上の手続きを改めて意識してゆくことにも繋がった。さらに、現地図書館やデータベースの活用に関する助言、シンポジウム口頭発表の応募に際する支援、文献や研究者の紹介といったサポートを頂いた。

研究者との意見交換

自身の研究テーマについて、近年学位取得されたフランス人および日本人の研究者と話すことによって、研究への助言を頂いたり、関連するシンポジウムの情報を得られた。それらの機会に、自身の研究課題の学術的意義を共有できたことは励みになった。

視野の規模と人脈の広がり

まず、今回の研究滞在を経て、博士論文の研究対象のコーパスが広がった。また、フランス人研究者と話すなかで、フランスを超えた国際的視野を持つことができた。それは、研究対象の装飾画が生み出されたフランスの歴史的背景にとどまらず、近隣諸国の動向との関連へも目を向けることとなったためである。研究活動の場を複数の国にまたがって置く、彼らの指摘からは、刺激も受けた。このような視野の拡張は、研究対象の範囲は別として、今後の研究において、自身の視点を常に批判的に捉えてゆくことに役立つと思われる。

さらには、研究対象の装飾画は、現在も区庁舎の婚礼の間や祝祭の間に設置され、フランス人の生活の公的な一場面を飾っているものであり、従来ほとんど研究対象とされてこなかった、これらの装飾画について、外国人である報告者がもたらし得る知見が興味深いと指摘されたことをきっかけに、フランス社会の他者として自身が有していた視線を再認識するに至った。

受入教授や、今回の研究滞在中に交流した研究者の幾人かとは以前からコンタクトがあったが、今回さらに継続的な関係を得られたことが、今後予定されているシンポジウムなどの機会を通じた、新たな発展に繋がった。